

# がん化学療法を受ける患者の治療延期によって生じる思いの分析

長 光代<sup>1)</sup>, 一ノ山 隆司<sup>2)</sup>, 若林 健治<sup>1)</sup>  
杉本 明希<sup>1)</sup>, 岩城 光子<sup>1)</sup>

1) 厚生連滑川病院

2) 金城大学看護学部看護学科

## 要 旨

本研究は、治療延期を繰り返すがん患者の思いを明らかにすることを目的とした。投与基準を満たさず当日治療が延期になった体験を持つ6人を対象とし、質的記述的分析を行った。治療延期を繰り返すがん患者の思いの特徴には、【治療延期の判断は主治医に任せる】【治療延期は仕方がないと受けとめる】【治療延期に拘らず変わらない生活を送る】と判断しながらも【化学療法に賭ける】ことにより【治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一喜一憂する】という思いの中で揺らいでいた。これらは、【化学療法看護に期待する】【治療中の家族のサポートの必要性を実感する】ことが後押しとなり、【生活と共に治療を継続したい】ことによって、【治療延期は今後の生き方を考えさせる】という価値観を見出していた。病状の進行にかかわらず、今後の生き方について新たな価値観を見出していくケアの重要性が示唆された。

## はじめに

わが国におけるがん対策<sup>1)</sup>は、2006年にがん対策基本法の成立、2007年にはがん対策推進基本計画の策定があり、2012年に見直しがなされた。重点的に取り組むべき課題の1つとして、手術療法、化学療法、放射線療法の更なる充実とこれらを専門的に行う医療従事者の育成が求められている。

近年のがん化学療法は、新薬の開発や副作用対策を重視した支持療法により、生存期間のみならずQOL向上に寄与している。さらに、診療報酬改定が後押しとなり、チーム医療の推進における入院期間の短縮と外来治療への移行によって、今まで通りの生活を維持しながら治療が継続できる1つの選択肢となり発展を続けている。よって、がん化学療法を受ける患者とその家族の看護の役割は重要である。

しかし、がん化学療法を受ける患者の中には、

副作用症状による苦痛や日常生活上の不都合さを体験し、死に対する不安を感じながらも治療の効果に期待を抱き闘病生活を送っている現状が考えられる。

外来がん化学療法を受ける患者の心理的側面に関する先行研究<sup>2)</sup>では、「外来がん化学療法を受ける患者の体験」「外来がん化学療法を受ける患者が抱える心理的問題」「外来がん化学療法を受ける患者のエンパワメント」「外来がん化学療法を受ける患者のニーズ」「外来がん化学療法を受ける患者・家族への影響」という5つの分類を報告している。中でも、治療経験や治療内容の違いによる患者の心理的側面を考慮した看護介入方法の発展が求められている。

さらに、瀬山ら<sup>3)</sup>の報告では、外来化学療法を受けながら転移や憎悪を体験したがん患者は、治療継続という同一の意思決定を行っているが、化学療法を継続する意味は個々に相違があることを明らかにし、初期治療が提示される時から患者

や家族に関わる重要性について述べている。また、今井ら<sup>4)</sup>は、入院治療を受けた高齢がん患者の生活者として生きてきた生活史に視点を向けることが、“がんと共に生きる”ことに影響すると報告している。これらは外来、入院治療のいずれも患者の自律性を尊重した上でその人らしく生き抜くための支援を模索するものであると言える。

一方で、岡元ら<sup>5)</sup>は、がん患者が治療の継続ができない場合においても、医療者が支え安心感を持てるような援助の重要性について指摘している。当日の治療が何らかの理由で延期になる場合のがん患者の思いに焦点を当てた先行研究は見当たらない。そのため、継続治療中に投与基準を満たさず当日の治療が延期になる場合には、診察後に患者がどのような思いを抱いて帰宅し生活をしているのかや治療への意欲にどのような影響を与えているのかについて看護師は十分に把握できずにいることが考えられる。以上のことより、本研究では治療延期を繰り返す患者の思い（主観的体験）を知ることは、患者の今後の生き方について示唆が得られると同時に、看護師の果たす役割が明確になり、がん化学療法看護の充実に繋がるのではないかと考える。

## 研究目的

投与基準を満たさないことから治療延期を繰り返すがん患者の思いを明らかにする。

## 用語の操作的定義

治療延期とは、有害事象のグレードや全人的苦痛の増強によって投与基準を満たさないと判定され、当日のがん化学療法が見送られて次回の治療日まで延期となった場合とする。

思いとは、患者の主観的体験であり、がん化学療法を受けている患者が治療延期を繰り返す体験と対処方法を通して抱く気持ちや考えとする。

外来化学療法とは、通院しながら化学療法を受けることとする。

投与基準とは、化学療法の有害事象の評価として、有害事象共通用語基準日本語訳に沿ってグレード評価を行い、さらに本研究では、その他疼

痛のアセスメント、精神的苦痛、患者の気がかりを含めた評価とする。

治療延期を繰り返すとは、投与基準を満たさず治療ができない日が2回以上ある場合とする。

## 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究では、研究協力者のありのままの思いを抽出し、その体験を明らかにすることが重要となる。そのため、協力者の語りがデータとなり、そのデータの意味を探究することができる質的記述的研究法が適していると判断し選択した。

### 2. 調査期間

201X年5月22日～201X年1月15日

### 3. 研究協力者

A病院B病棟および外来化学療法室にて、症状緩和、延命、QOL向上目的の化学療法を受けているがん患者であり、主治医と該当部署の責任者から30分程度の面接が可能な心身の状態であると判断された患者のうち、投与基準を満たさず当日治療が延期になった体験を持つ6人とした。

### 4. データ収集方法

投与基準を満たすことができず治療延期になった時の患者の思いが表現できるような半構成的面接法とし、インタビューガイドを独自に作成して面接を実施した。データ収集は、研究協力者の希望日時に合わせて、研究者が、治療当日の採血待ち時間に外来個室にて30分程度の面接を行った。会話のすべてをICレコーダーに録音し、その内容を逐語録に起こして質的データとした。インタビューの内容は、「治療が延期となった時はどのような気持ちになりますか」「次の治療日までどのような気持ちで過ごされていますか」という質問を基本として治療や日常生活について自由に語っていただいた。

### 5. データ分析方法

逐語録から1事例毎に治療延期の体験に伴う気

表 1. 研究協力者の概要

対象者	性別	年齢	病名	化学療法期間	治療延期回数
A氏	女性	70歳代	左乳がん鎖骨下リンパ節転移	3年10か月	6回
B氏	女性	40歳代	横行結腸がんリンパ節転移肝転移	1年8か月	3回
C氏	女性	80歳代	上行結腸がん大動脈周囲リンパ節転移	6か月	3回
D氏	男性	70歳代	直腸がん多発肝転移肺転移リンパ節転移	1年4か月	3回
E氏	女性	50歳代	S状結腸がん肝転移骨転移	1年4か月	7回
F氏	男性	70歳代	直腸がん肝転移	1年8か月	4回

持ちや考え、対処に対する思いだったのかが反映される文脈から、意味内容が損なわれないように文章を抽出した。比較検討しながら意味内容毎に抽出した文章を、記述データ、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象度を上げてネーミングした。分析過程においては、研究者間で意見が一致するまで討議し、真実性の確保に努めた。

## 6. 倫理的配慮

研究協力者の選定においては、あらかじめ主治医と該当部署責任者と話し合いの上、30分程度の面接が可能な心身の状態である患者とした。研究協力者の治療日の予定に合わせて個室を使用し面接を実施することや、本研究の趣旨と目的、方法などについて以下の説明を行った。情報管理の徹底、匿名性の保持、途中辞退の権利、研究協力の有無に拘らず不利益は生じないこと、心身の安全安楽に配慮した希望の日時、場所の調整を行うこと、万が一の対処方法について、面接中に体調不良が生じた場合は中断あるいは中止すること、会話内容の録音許可、データは本研究以外に使用しないこと、研究終了後にはデータを破棄すること、研究結果については、学会や紙上で公表することを口頭と文書を用いて十分に説明し、自由意思に基づき同意書のサインにより、研究協力の承諾を得た。なお、本研究は研究者が所属するA病院看護部倫理委員会にて承認を得てから実施した。

## 結 果

### 1. 研究協力者の概要

研究協力者の概要を表1に示した。平均化学療法期間は、 $19.7 \pm 8.7$  か月、平均治療延期回数は、 $4.3 \pm 2.6$  回であった。なお、研究協力者は各治療ガイドラインに沿って治療計画書の基、標準治療を受けていた。面接回数は、6人とも1回であり、平均面接時間は  $19.8 \pm 13.7$  分であった。

### 2. 投与基準を満たさず治療延期を繰り返すがん患者の思いの分析結果を、各カテゴリーの特徴として示す。

協力者6人の面接内容を分析した結果、69記述データを基に、30サブカテゴリー、9カテゴリーが抽出された。以下の文中では、【 】をカテゴリー、< >をサブカテゴリー、『 』を記述データとして表記する(表2)。

#### 1) 【治療延期の判断は主治医に任せる】の特徴

このカテゴリーでは、治療延期の判断は主治医に一任するという思いが示された。『先生に任せるしかないと思っていた。体のことは先生しかないし、先生に頼るしかないからね。』『いつもはらはらして点滴受けるくらいなら延期してもらった方がいいわと思って、この方法でいい。』という主治医の判断を優先したい思いから成る<はらはらして治療を受けたくないため延期の判断は主治医に任せた>の1サブカテゴリーで構成された。

表2. 投与基準を満たさず治療延期を繰り返すがん患者の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	記述データ (代表例)
治療延期の判断は主治医に任せる	はらはらして治療をうけたくないため延期の判断は主治医に任せる	いつもはらはらして点滴受けるくらいなら延期してもらった方がいいわと思って、この方法でいい。
治療延期は仕方がないと受けとめる	骨髄抑制は仕方がないため治療延期になっても自然に任せるしかない	先生に何か言ってもフンフンって聞いとるだけ。だって寿命に逆らっても仕方ないし、白血球上がらなくなったら、もう点滴できなくなると言われたけど、どうなる。そりゃ、自然に任せるしかない。
	前もって治療延期の可能性について聞いていたため落ち込むことなく仕方がないと感じた	薬剤師にこんこんと1時間くらいかけて薬剤の話の前もって詳しく聞いたので、初めて延期になったときは、ああ、これかと思えた。
治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一喜一憂する	治療延期は自分ではどうしようもないため仕方がない	仕方ないと思う。うん、そうでしょう、どうすることもできない、私としては、先生がやっぱり、止めたほうがいって言われるから、しょうがない。
	治療が延期になっても現状維持していることが不安感を解消し前向きな気持ちにさせる	ちょっとでもほら、悪い方に傾くとまた考え方が変わってくると思うけど、今はもう現状維持ですときているから今不安って言うことはないね。
	治療が延期になると副作用による身体的苦痛が軽減しほっとする	やっぱり気持ち的には身体が楽だからね、ほっとしたって言う気持ちがあるね。それで先生がまた状況が変わってないというから(ケモ中止になっても)、ほっとしたということが本音かわからん。
	治療継続を決めかねている	今のCTの結果、半年経ってどう言われるか分からないけど、1年間だけ受けてみて、様子がどういふものかを見て、受けていこうか決めかねている。
治療延期による効果への影響が気がかり	治療延期による効果への影響が気がかり	今度(抗癌剤の投与量が)人の半分くらいか、そうするとどうなるかって、今日、CT受けるので。
	病気のことを受けとめきれない夫への気遣い	夫はそういうことを私が話するのを怖がるし、だめなんだわ、あの人に言ってもだめだとわかっているから、家では誰にも言えない。夫にいろいろ話するのは無理だわ。
	夫の方が心配していた	逆に夫の方が心配していて、おろおろしていた感じかな。
	子どもは病気のことを冷静に捉えている	子供はまあ、特に、私の様子を見てても何も言わないし、冷静かなと思ってみている。
治療中は家族のサポートの必要性を実感する	夫に家事を手伝ってもらう毎日	私が具合悪くなると、旦那が(家事を)すると、「(私は)寝ていて、(旦那が)帰って来てから家事をするっていうのも。」
	家族のサポートはない	家族おる人と、独り身とはねえ、違うと思うけど、その日の晩の、あの一人だからね。買い物とね、帰ってから食事の米をといたり何でも、食事の準備、んー、そんなとこかな、その日は。
	治療中止と余命について考える	今回から中止になると言われたら、この後どうなるかね、まあ、その後中止するのがよいのか、治療に対しては任せるしかないね、言ってみれば、ははっ、ははっ。まあ、人生いくつまで生かれるかだね。
治療延期は今後の生き方を考えさせる	年を重ねると死ぬ存在であることを受け入れ怖さはない	私らみたい年になって分かることがある。これでまだ私も若かったり、子供が小さかったりしたらまた違う。子供残して死ねないから、絶対に死なないと思ったかも、けど80過ぎて子供も大きくなって、今で私一人だろう。何にも心配せんていから、自分の事だけ。本当だよ。
	余命を見据えて今後の過ごし方の見通しを立てる	終活してるよ、私にとつての終活は、物を残さないこと。残される人も困るやろう？お金ならいいけどね(笑)、洋服とかいろいろ残してあっても残される人には余計なものだわ、だからなるべく片付けてね。着物も服も古いし、もらって嬉しいものではない。
	最後に苦しむことへの気がかりがある	ただ心配なのは、その時がきたらひどい苦しむのかと思って。
	副作用症状は辛い	こないだの時はひどかった。いつもなら4~5日したらいつも通りなのにこないだ、なかなか戻らんかった。まあねえ、そうなるようになるにしかならんかろう？
生活と共に治療を継続したい	早期発見できなかったことを悔やむ	検診で見つけてもらえなくて、3か月後に見つけてもらって、ショックだったわ。
	体力低下を実感する	やっぱり体力が持たないね。うん、やっぱり運動も少なくなっし、昔ほど。
	採血困難が気がかり	採血がないと聞くとやったーという感じで助かるわ。〇〇さんに取ってもらうことに決めているけど今日はないよって話してたの。本当に出ないからね...看護師さんにも気の毒でね、採血が一番困る。
	感染予防対策を取っている	風邪をひかないように注意していたよ、特に冬は。スーパーも行かないように気を付けていた、夏はそんなに注意しなくてもいいかなと思うけど問題は冬だね。
	日頃の生活は副作用症状に合わせて工夫している	車運転している時に滑り止めのものつけている。あと歩く時は家の近間をね、夕方ね、何かあった時とかに人が見たら誰かに助けてもらえる。要は近所の周りやだね、前だったら遠くまでいったけど、知っている人がいる近間でね。
化学療法看護に期待する	化学療法看護教育への指摘	勉強のつもりでこっちは言うのだから、あんたらの勉強のために言うのだから、
	医療者の支えが安心感をもたらす	「Sさんどうですか？最近どうですか？」って話しかけてくれればこっちも色々話できるし、予約してある人が分かっているんだから、何曜日の朝来るっていうのは分かっているのだから、そういうのに合わせて来てくれれば、安心だね。
治療延期に拘わらず変わらない生活を送る	心穏やかに普段通りの生活を送っている	今、自分でも不思議なほど動転もしないでいるよ、いつも通り。
化学療法に賭ける	お金にかえられない命	4万円得した(笑いながら)。1回に4万掛かるから、だから、だけど、助かったとは思わないね。治療が1回、あの、抜けたらそれだけ体にも影響が出ると思うから、でもこれ(データの用紙)見たら4週間抜けても、結構数値は下がってるから、ああ安心したと。
	治療効果があれば諦めないで頑張れる	治療の効果があればやっけていてもやる甲斐があるけど、副作用が強くて大変なのに効果がないとやっぱりがっくりくるしね。
	治療日はやりがいを感じる	多少はあれしたい、これしたいって気持ちはあるね。でもやっぱりだるいなあって気になって考えてしまうね。でもやっぱり外に出て、こういう所くると(病院)気分的には身体がねえ、何かしようとか対応力はまあ確かに家に居る時よりは対応できるね。気持的にはやりがいがある。
	出来る限り順調に治療を行い完治への希望を持つ	毎回毎回2週間おきに順調にやっけていけば、そりゃ、完治するのねえ、早いのかと思うし。



## 2) 【治療延期は仕方がないと受けとめる】の特徴

このカテゴリーでは、治療延期は自分の力ではどうしようもできず仕方がないという思いが示された。『今日白血球少ないからこんで帰られと言われる。白血球足りないのどうにもならない。私にも出来ない。』『(省略) どうなる。そりゃ自然に任せるしかない。』の自然には逆らえないという考えから成る<骨髄抑制は仕方がないため治療延期になっても自然に任せるしかない>、『副作用で白血球が下がることがあることを聞いていたので、仕方がないなあと思ってね。』『薬剤師にこんこんと1時間くらいかけて薬剤の話をもっと詳しく聞いたので、初めて延期になった時は、ああ、これかと思えた。』のように心の準備ができていたことから成る<前もって治療延期の可能性について聞いていたため落ち込むことなく仕方がないと感じた>、『どうも出来ん、私としては。』『1回抜けたからと言ってどうも言われんね、私からはどうも出来ない。』から成る<治療延期は自分ではどうしようもないため仕方がない>の3サブカテゴリーで構成された。

## 3) 【治療延期に拘らず変わらない生活を送る】の特徴

このカテゴリーでは、治療延期に一喜一憂することのない普段通りの生活への思いが示された。『今、自分でも不思議なほど動転もしないでいるよ、いつも通り。』『延期になって帰った日は、まあ普通に家のことをしたりで特に困るということもなく。』などの変わらない生活から成る<心穏やかに普段通りの生活を送っている>1サブカテゴリーで構成された。

## 4) 【化学療法に賭ける】の特徴

このカテゴリーでは、抗がん剤治療に希望を持つ思いが示された。『1回に4万円掛けるから。だけど、助かったとはそうは思わないね。でもこれ(データ用紙)を見たら4週間抜けても結構数値が下がっているから、ああ安心した。』のように治療費より生命が大切と考えることから成る<お金にかえられない命>、『治療の効果があればやっけていてもやる甲斐があるけど、副作用が強くて大変なのに効果がないとやっ

りがっくりくるしね。』など治療効果を重視する思いから成る<治療効果があれば諦めないで頑張れる>、『(省略) 気持ち的にはやりがいがある。』から成る<治療日はやりがいを感じる>、『毎回毎回2週間おきに順調にやっていたら、そりゃ、完治するのねえ、早いのかと思うし。』『それでもその白血球が少なくても、何かできる方法も考えられたらいいね。』と治療に希望を持つ思いから成る<出来る限り順調に治療を行い完治への希望を持つ>の4サブカテゴリーで構成された。

## 5) 【治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一喜一憂する】の特徴

このカテゴリーでは、治療延期が及ぼすメリットとデメリットに揺れ動く思いが示された。『治療中止になった時も気持ちは前向きになって歩いたりはしているね、現状維持はしている。』『これ(治療延期と再開)が今ずっと進んでいって、まあ、そりゃ、ほら、病気との兼ね合いでまあ、バランスだね。』『(省略) 今はもう現状維持でずっと来とるから今不安っていうことはないね。』『今のところは気持ちも前向きやし、症状も出ていないから何とも思わないけど。』など現状維持が前向きになれる原動力となっていることから成る<治療が延期になっても現状維持していることが不安感を解消し前向きな気持ちにさせる>、『だるさが出るから、でも身体的には楽だね(抗がん剤をしなれば)。』『気持ち的には楽っていうのはおかしいけどほっとした感じはある。1回抜けた方が元気な状態でその次もって、まあ食事もとれとったからね。』『まあ、2週目の週末になったら一番調子が良くなる。それで中止になったらその状態が長く続くからほっとするね。』『(治療が延期になったら) あ、よかったわと言ったらいいからおかしいけど、体痛めつけなかったという気持ちが。』など治療延期はほっとするという気持ちから成る<治療が延期になると副作用による身体的苦痛が軽減しほっとする>、『(省略) 1年だけ受けてみて、様子がどういふものかって事で、受けていこうか決めかねている。』から成る<治療継続を決めかねている>、『結局

人の2回するところの1回だけ。正直言って、これで効くのだろうか。』『人の半分でどうなるのかって。』など治療効果への気がかりから成る<治療延期による効果への影響が気がかり>の4サブカテゴリーで構成された。

6) 【化学療法看護に期待する】の特徴

このカテゴリーでは、化学療法看護における看護師への要望が示された。『勉強のつもりでこっちは言うのだから。あんたらの勉強のために言うのだから。』と看護への要望から成る<化学療法看護教育への指摘>、『看護師さんと先生がいるから私は大丈夫だよ。看護師さんと先生に聞いてもらえるし余計安心だわ。』『先生の診察の前に私のところに、待合室来て、どうけ？』と言ってみんな話を聞く、あれはいいわね。』『話しかけてくれば、こっちもやっぱりいろいろと話ができるし、安心だね。』など医療者との関わりから成る<医療者の支えが安心感をもたらす>の2サブカテゴリーで構成された。

7) 【治療中は家族のサポートの必要性を実感する】の特徴

このカテゴリーでは、患者からみた家族への思いが示された。『あの人(夫)の様子を見ると心配で。』『お父さんに私いなくなったらどうする？大丈夫？』と言うと何とかなるって言うけどどうなるやら。』など夫を思いやる気持ちから成る<病気のことを受けとめきれない夫への気遣い>、『逆に夫の方が心配していて、おろおろしていた感じかな。』『この前のアレルギー出た時も心配して病院に来て見に来てでしょう。』の夫の方が心配していることから成る<夫の方が心配していた>、『子供はまあ、私の様子を見ても何も言わないし、冷静かなと思ってみている。』から成る<子供は病気のことを冷静に捉えている>、『私が具合を悪くすると、旦那が(家事を)すると。(私は)寝とって、(旦那が)帰って来てから家事をするっていうのも。』から成る<夫に家事を手伝ってもらう毎日>、『家族おる人と独り身とはねえ、違うと思うけど。その日の晩の、一人だからね。(省略)』の一人暮らしから成る<家族のサポートはない>の5サブカテゴリーで構成された。

8) 【生活と共に治療を継続したい】の特徴

このカテゴリーでは、治療と生活に折り合いをつけて過ごしたいという思いが示された。『こないだの時はひどかった。(中略)なかなか戻らなかった。』『手足のしびれだけは、ずっとついてく。』という様々な副作用から成る<副作用症状は辛い>、『検診で見つけてもらえなくて3か月後に見つけてもらって、ショックだったわ。』から成る<早期発見できなかったことを悔やむ>、『最近もう、そうする元気も無い。』『やっぱり体力が持たないね。』から成る<体力低下を実感する>、『採血がないと聞くとやったーという感じで助かるわ、本当に出ないから看護師さんにも気の毒でね。採血が一番困る。』から成る<採血困難が気がかり>、『風邪を引かないように注意はしていたよ。(省略)』から成る<感染予防対策を取っている>、『車運転している時に滑り止めのものつけている。(省略)』から成る<日頃の生活は副作用症状に合わせて工夫している>の6サブカテゴリーで構成された。

9) 【治療延期は今後の生き方を考えさせる】の特徴

このカテゴリーでは、治療延期を繰り返すことによって先々のことを考えてしまうという思いが示された。『今回から中止になるって言われたらこの後どうなるかね？(中略)まあ、人生いくつまで生きられるかやね。』から成る<治療中止と余命について考える>、『別に何も思ったりしなかったよ。年だもん、何も怖ない。』『めめめ、くよくよしたって何も始まらない。お迎えきても寿命や。皆いつか死ぬがんだから、一緒だろ。』など人生観を持っていることから成る<年を重ねると死ぬ存在であることを受け入れ怖さはない>、『終活しているよ。私にとっての終活は物を残さないこと。残される人も困るだろう？』『先生には最期まで頼むね、延命治療はいらんからねって話をしてある。』など今後の過ごし方から成る<余命を見据えて今後の過ごし方の見通しを立てる>、『ただ心配なんは、その時来たらひどく苦しむのかと思って。』などから成る<最後に苦しむことへの気>

がかりがある>の4サブカテゴリーで構成された。

## 考 察

本研究では、がん化学療法の治療延期に伴って生じるがん患者から抽出された9つの思いのカテゴリーの特徴を考察し、看護支援に示唆を得る。

患者は、治療による血液毒性、消化器症状や皮膚障害、末梢神経障害の副作用と同時に精神的な負担を抱えている。中には、はらはらして治療を受けたくないという気持ちから主治医に任せるしかないと思【治療延期の判断は主治医に任せる】と判断し、あらかじめ治療延期の可能性について説明を受けていたことや骨髄抑制の自覚症状がないことより自分ではどうにもできず自然に任せ【治療延期は仕方がないと受けとめる】ことができていると考えられる。その一方で、<心穏やかに普段通りの生活を送っている>のようにいつも通りという心構えの中で【治療延期に拘らず変わらない生活を送る】ことを大切に過ごしていることが推察される。このことは、患者は延期という事実を一喜一憂することなく自然体で自分なりにより良い生活を送っていることが伺える。その一方で、患者はできる治療が抗がん剤しかないと捉えて、自身の命を<お金にかえられない命>と考え、<出来る限り順調に治療を行い完治への希望を持つ>という願いを持っていることが伺える。そのことによって<治療効果があれば諦めないで頑張れる>や<治療日はやりがいを感じる>ように【化学療法に賭ける】という思いを持ち続けていると考える。このような状況が、治療が延期になることで副作用症状の軽減から身体的苦痛が緩和されることによって<治療が延期になると副作用による身体的苦痛が軽減しほっとする>反面、<治療が延期になっても現状維持していることが不安感を解消し前向きな気持ちにさせる>や<治療延期による効果への影響が気になり>というように治療効果によって患者の気持ちを左右させていることが推察される。このことから<治療継続を決めかねている>という複雑な気持ちを抱かせ、【治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一

喜一憂する】という葛藤が生じていると考えられる。瀬山ら<sup>3)</sup>は、転移や憎悪を体験したがん患者が治療を継続することに対する意味づけには、情緒的な反応の各局面に相違があることを報告している。がんと闘いに挑む一方で化学療法にためらいを感じて化学療法を開始する局面、生と副作用のバランスを計りながら化学療法を継続する局面を抽出しているが、本研究結果では、病状の進行にかかわらず治療延期を体験したことで、がん患者は相反する複雑な思いを抱き揺れ動きながら過ごしていることがわかる。その一方で、患者の治療延期の体験は、佐藤ら<sup>6)</sup>の報告と類似し、治療に対して持ち合わせる積極的な思いと消極的な思いの間で揺れ動いているが、前向きに希望を持つことによって揺れ動く気持ちに折り合いをつけていることが考えられる。このことより、化学療法導入時の病状の受けとめ方を把握し、継続的なコミュニケーションにより患者のそれぞれの価値観を尊重しながら副作用を予防し生活に合わせた対策を図ることが重要であると考えられる。

さらに、患者が<化学療法看護教育への指摘>をするのは、看護師に安心して安全な医療と看護を受けたいという必死な思いがあり、信頼する気持ちがあるからこそ要望をストレートに表明していると捉えることができる。また、<医療者の支えが安心感をもたらす>ことから、診察前にこまめに問診をすることで副作用対策がタイミングよく行われ安心して治療を受けることに繋がると考えられ、生と死に向き合うからこそ【化学療法看護に期待する】という思いが表れていると推察できる。中ら<sup>7)</sup>は、看護師の患者の体験している苦痛に気付いているがその気づきを看護ケアに生かすことができない状況に対して質の保証への取り組みの必要性を述べていることから、化学療法診察前の問診を取り入れた外来看護と化学療法室、病棟間の連携の充実や専門家の介入によるチーム医療の構築が不可欠であると考えられる。さらに、患者の語りから見えてくる家族像には、夫にはすべてを話せないと感じ、<病気のことを受けとめきれない夫への気遣い>や<夫の方が心配していた><夫に家事を手伝ってもらう毎日><子どもは病気のことを冷静に捉えている>のように



【治療中は家族のサポートの必要性を実感する】ことで家族が患者の支えであると同時に家族も支えを必要としていることが考えられる。その一方で、一人暮らしのために＜家族のサポートはない＞ことから患者と医療者間の協働が重要となる。つまり、日々の患者を取り巻く周囲の関わり方が基盤となり、患者の【化学療法に賭ける】という思いを継続的に支えることに繋がっていくと考える。

武田ら<sup>8)</sup>は、外来化学療法を受けながら生活している患者には、「このままでいたい」というニードと「自分にできることをしていきたい」というニードがあることを報告している。本研究結果においても、患者は＜早期発見ができなかったことを悔やむ＞思いを持ち、治療当日の＜採血困難が気になり＞があることや＜副作用症状は辛い＞という治療がもたらす副作用症状の苦痛を訴えている。また、＜体力低下を実感する＞ものの＜日頃の生活は副作用症状に合わせて工夫している＞や＜感染予防対策を取っている＞という積極的な態度は【生活と共に治療を継続したい】ように、持っているニードからバランスよく行うためのセルフケア力を発揮していると考えられる。

患者は治療延期を繰り返すことによって＜治療中止と余命について考える＞という思いや＜最後に苦しむことへの気付きがある＞によって死の恐怖感があると考えられる。しかし、＜年を重ねると死ぬ存在であることを受け入れ怖さはない＞や＜余命を見据えて今後の過ごし方の見通しを立てる＞ことで自分らしく最後まで生きたいという信念があり、【治療延期は今後の生き方を考えさせる】という新たな価値観を見出していると考えられる。このことは、今井ら<sup>4)</sup>の高齢者がん患者は、長い人生経験を通してその人らしく生きるエネルギーの源があるという結果を裏付けていると考える。患者の生活背景を看護に取り入れていく工夫が重要となり、抗がん治療に伴う苦痛だけではなく患者のこれまでの対処方法を十分に理解し、持っている力を強化していく必要がある。また、北添ら<sup>9)</sup>の生きることへの信念が原動力となり“前に向かう力”を支えているように、本研究の協力者も現実を直視する強さを持って今後の

生き方に対して新たな価値観を見出し備えていることが考えられる。

以上のことより、がん化学療法の治療延期を繰り返すがん患者への支援には、患者自身の思い描く治療と生活は両輪であるということを尊重し、イメージが計れるようタイミング良く情報提供と副作用対策を共に行っていくことが重要となる。がんと共に生きる生活者としての視点から、その人らしさを支えるために、チーム医療を基盤として家族への配慮と継続的なコミュニケーションの必要性と新たな価値観を見出すことを支えるケアの重要性が示唆された。

## 結 語

投与基準を満たさず治療延期を繰り返すがん患者の思いには、【治療延期の判断は主治医に任せる】【治療延期は仕方がないと受けとめる】【治療延期に拘らず変わらない生活を送る】と判断しながらも【化学療法に賭ける】ことにより【治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一喜一憂する】という治療効果の期待と副作用への不安な思いの中で揺れ動いていた。これらは、【化学療法看護に期待する】【治療中は家族のサポートの必要性を実感する】ことが後押しとなり【生活と共に治療を継続したい】ことによって【治療延期は今後の生き方を考えさせる】という価値観を創生していた。

## 本研究の限界と今後の課題

今回は協力者数、施設ともに限られており一般化には限界がある。しかし、患者の主観的体験を知ることは、がん化学療法を受ける患者の看護について検討する基礎資料となる。治療延期を体験した患者自身が創生する価値観を見出してケアするという観点から研究を深めたい。

## 謝 辞

本研究の実施にあたりインタビューにご協力いただきました協力者の皆様と、研究を進めるにあ



たりご指導・ご協力いただきました関係者の皆様、富山大学教授八塚美樹先生に深く御礼を申し上げます。

### 引用文献

- 1) 厚生労働省：がん対策について. <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/24.html> (2014年9月24日閲覧)
- 2) 八尋陽子, 中井裕子, 東 あゆみ：外来がん化学療法を受ける患者の心理的側面に関する文献検討. 日本看護研究学会雑誌 35(5)：129-136, 2012.
- 3) 瀬山留加, 神田清子：化学療法を受けながら転移や憎悪を体験したがん患者の治療継続過程における情緒的反応と看護支援の検討. 日本がん看護学会誌 21(1)：31-39, 2007.
- 4) 今井芳枝, 雄西智恵美, 坂東孝枝：治療過程にある高齢がん患者の“がんと共に生きる”ことに対する受け止め. 日本がん看護学会誌 25(1)：14-23, 2011.
- 5) 佐々木常雄, 岡元るみ子編：がん化学療法ベスト・プラクティス. 8-17, 照林社, 東京, 2012.
- 6) 佐藤かおる, 森田京子, 長谷川博美他：化学療法の効果が現れにくくなっている患者の「生きること」への思い. 第37回日本看護学会論文集成人看護Ⅱ：62-64, 2006.
- 7) 中晃子, 大石ふみ子, 大面和子：外来化学療法患者の苦痛と困難に関する看護師と患者の認知の比較と看護のあり方. 三重看護学会誌 9：41-54, 2007.
- 8) 武田貴美子, 田村正枝, 小林理恵子他：外来化学療法を受けながら生活しているがん患者のニーズ. 長野県看護大学紀要 6：73-85, 2004.
- 9) 北添加奈子, 藤田佐和：外来化学療法を受けるがん患者の“前に向かう力”. 日本がん看護学会誌 22(2)：4-13, 2008.

## Feeling of cancer patients by postponement of chemotherapy

Mitsuyo CHO<sup>1)</sup>, Ryuji ICHINOYAMA<sup>2)</sup>, Kenji WAKABAYASHI<sup>1)</sup>,  
Aki SUGIMOTO<sup>1)</sup>, Mitsuko IWAKI<sup>1)</sup>

1) Kouseiren Namerikawa Hospital, Department of Nursing

2) Faculty of Nursing, Department of Nursing, University of Kinjo

### Abstract

This study aimed to clarify how cancer patients felt when treatment was postponed repeatedly. Six patients that had experienced postponement of treatment on the scheduled day due to failure to satisfy the administration criteria were subjected to qualitative descriptive analysis. As the characteristics of feeling of cancer patients that had experienced repeated treatment postponement, they “left judgment of treatment postponement to the physician in charge”, “understood inevitability of treatment postponement”, and “led a life with no change irrespective of treatment postponement”, whereas they felt uneasy because they reacted nervously to “avoidance of distress and treatment response by treatment postponement” by “betting on chemotherapy.” With the encouragement of “hope for nursing care for chemotherapy” and “realizing the necessity of family support during treatment”, they found a new value that “treatment postponement made them think about the future way of living”, because they wished to “continue treatment as well as their life”. Irrespective of disease advancement, importance of care to find a new value in the future way of living was suggested.

### Keywords

cancer chemotherapy, treatment postponement, subjective experience